

## 医師・看護師などの専門家にいきがいや助け合いの重要性をどう理解してもらおうか

### 提言

地域に目を向け、助け合い活動なくして病がちの人の暮らしは支えられない。そう考え実践している医療職は、まだ小さなコアであるが、確実に増えていく兆しを感じる。私たち一人ひとりも遠慮せずに声を出し、情報を提供しよう。プロとアマの相互乗り入れが出来るかどうか、今問われている。

### 登壇者

【進行役】	村田 幸子氏	福祉ジャーナリスト
	川口 篤也氏	(医) 道南勤労者医療協会函館稜北病院副院長
	新田 國夫氏	(医) つくし会理事長
	沖田 光昭氏	公立みつぎ総合病院院長
	麻野 信子氏	(特非) さわやか徳島 幸せの家・ありがとう会長

### 議事要旨 村田 幸子氏

函館稜北病院の川口医師、東京国立市で30年も前から在宅医療に取り組んでこられた新田医師、それに地域包括ケアシステム発祥の地とも言える公立みつぎ総合病院長の沖田医師、さらに徳島で地域の居場所をつくり活動する麻野さんの発表は、どれも地域に目を向け、医療職と地域住民によるパートナーシップで「暮らしを支える医療」を実現しているものだった。地域包括ケアシステムにおける医療改革は実現できるのだと明るい展望が見えてきたと思いきや、「それでは現在、先生方のようなお考えで医療を実践している方は、全体でどのくらいいらっしゃいますか」とお尋ねすると、そろって「5%くらいですかね」とのこと。会場一瞬、シ～ン。

しかし川口医師の「急性期病院の職員は退院した後の暮らしや本人の意向を知らない現実がある。そのため『函館オープンカンファレンス』を開催し、在宅での暮らしに医療側がどう関わったかの事例を基に、病院側、在宅側の相互理解を深めることを進めている」という実践例の報告や、新田医師の「苦痛を軽減するだけの医療は限界。その上に『いきがい』を求めることを目標にする医療へ。そのため医療者は、その人の暮らしの状況を見極め、根拠に基づく情報を本人と家族に提供することが

大事」などの意見。さらに沖田医師の「どんな職種であろうと、どんな部署にしよう関係なく、病がちの人の、人間としての課題をとらえ、そのために地域住民を含めて協働し連携するしくみ」をつくる大事さへ言及した発言など、示唆に富むものばかりだった。

まだまだ「病をみて人をみず」という従来の医療から抜け出せない中、どうしたら病がちの人の暮らしを支える医療に変わっていきけるかを議論したところ、地域医療に目を向ける医師を増やすべく教育現場は変わってきている。しかし当面は、病院では見えない暮らしの現実を知ることができるよう、あの手この手でたくさんしかけをつくる必要性が指摘された。同時に遠慮してもの言わない市民から脱却し、市民自身ももっと声を出す大切さについても言及された。

地域包括ケアシステムは、在宅で暮らせる限界を今よりさらに上げていこうというものだ。その実現には、医療職だけでなく、家族、地域住民、暮らしの中で接するあらゆる人たちが、病とともに生きている人が何を大事にして暮らしているかを共有し、信頼関係を築くことによって達成できると実感した分科会だった。

### アンケートの結果 参加者概数：28名 回答者数：25名



### ■ 寄せられた声から

- 自己決定の意味合いがよく理解できました。広く市民（隣人）に伝え、話し合いたいと考えます。